

## あとがき

今回は北斎(1760~1849)の浮世絵(木版)20点余を集めての展覧会である。きみの画廊は現代美術を扱うだけかと思ったら、古い浮世絵も扱うのか、とまずはけげんの面持ちをなさる方もあると思うので一言申し述べておきたい。

当画廊が北斎をとりあげるのは、北斎が西洋の近代絵画を先取りし、モネ、ドガ、ゴッホ、ゴーギャン等現代美術の先達に大きな影響を与えていた点に深い意味を感じているからである。浮世絵一般をとりあげるのでなく北斎という作家をとりあげているのである。飽くまで現代美術の視点からその原点たる北斎をみているのである。

北斎はわが国において、現在までのところその作品がもっとも多く海外(欧州)に輸出された作家であろう。ただいま国内市场で通用する作家も海外市场(欧米)ではさっぱり通用しない昨今のわが国美術業界の現状から考えると、国際的に通用しているこの北斎の持つ意味は大きい。北斎の作品が輸出された時代からくらべると現在は世界が著しく狭くなってきた。このことを考慮すると北斎の意味はもっと増すのである。この国際的な画狂人北斎に敬意を表し、この展覧会は企画されたのである。

今回のカタログのテキストはたにあらた氏にお願いし「北斎の“曲面画法”と現代美術」をご寄稿いただき感謝している。また、瀧口修造先生の「北斎と表現」(みづゑ1954・7)を再録させていただいた。昭和28年の春——この年ぼくは大学を卒業して農林中央金庫に勤めた——、農中の大会議室で瀧口先生が作製された映画「北斎」をみた。富嶽三十六景のうち神奈川沖からみた大きな波間からみえる富士山の部分、部分の大うつしとその動き、幾分重々しい男性ナレーターの声を今もなお鮮明に憶えている。29年前の昔である。それにしても、この映画は現在どうなっているであろう？もう一度みたいものである。……そんな思い出もあり瀧口先生のエッセーを再録させていただいた。

最後に、この展覧会は浮世絵にくわしいぼくの友人米津吉雄氏の協力がなければとうてい出来得ないものであった。感謝の意を表する次第である。